

「伝えたい、平和への想い」

滋賀県高島市立マキノ北小学校

藤原 弘美

1. 国際理解教育って何？（グローバル社会に生きるためには…）

○共感的想像力を養う。

○メディアリテラシーの力をつける。

（情報に対して、鵜呑みにせず、必ず本当にそうなのかどうか立ち止まり、自分で考えるスタンスで）

○歴史を踏まえ、節度と良識ある態度を身につけさせる。→他国の人々と信頼関係を築くことができ、手を携えて未来を切り開いていく土台となる。

2. はじめに

本校は、滋賀県内は北部の山間に位置する全校児童26名の小規模校である。学級は複式学級であり、本学級は5年生5名、6年生6名、計11名が在籍する。地域周辺には外国人が居住することもなく、日常、児童が外国人に接することはない。しかし、児童は人なつこく市のALTの先生が訪れる機会には積極的に話しかけたり遊んだりしている。また、高学年児童は、京都や奈良への校外学習時に、外国人に話しかけ写真を一緒に撮るという行動をとることもできる。そのような児童に、大局的には、少しでもものの考え方やとらえ方を世界に広げ、社会に働きかける実践力を身につけさせたいと考え、主として6年生児童に国際理解学習に取り組ませた。何分成果としての実践力は、彼らの将来において出てくるものである。それゆえ、今は、平凡に暮らす日常にあって、世界の貧困や不平等、平和についてふと立ち止まって考える、想像をする、共感をする、そんな子どもたちを育てたいと思っている。

3. 取り組みの手だて

◎社会の出来事に関心を持ち、自分の意見を発する力を育てる。

…毎週末の新聞スクラップ、週間子どもニュースを見て関心を持ったトピックについて意見を述べる。

◎歴史学習においては、為政者側と民衆側、被害者と加害者の両サイドから考えさせる。

…明るい社会3「日本の歴史」（岩崎書店）を副読本として使用

◎憲法についてしっかり学ぶ。

…「子どもに伝える日本国憲法」（井上ひさし著・講談社）

◎アクションする。

…「JNNE」（教育協力NGOネットワーク）の活動に参加、ユニセフ募金など

4. 取り組みの経過とコメント

〔5年生(2007年度)〕

複式学級において、すべての活動を6年生と共にすることによって、6年生の深く考える態度や意見にふれたり、自分なりに意見を言ったりする態度が育った。

2学期から新聞スクラップをし、コメントを200字内にまとめる取り組みを始めた。帰りの会（ショートホームルーム）において、当番がスクラップ記事を紹介した。

〔6年生(2008年度)〕

4月

1) 「世界一大きな授業でギネスに挑戦」に参加

2008. 4. 23 13:00～

※世界中で、同日、同時間に同内容「すべての子どもたちに質の良い教育を」の学習をすることにより「世界一大きな授業」となる。世界で約880万人の参加があった。

4月23日に世界同時開催の国際理解教育「世界一大きな授業」というキャンペーンのあることを新聞から見つけ申し込んだ。これは、世界180カ国の教育支援団体が、ユニセフ、ユネスコ(国連)の後援のもと、7年前から実施している「教育のためのグローバルキャンペーン」である。世界の子どもたちが（もちろん学級が参加登録した場合）同時刻に同じ内容を一斉に学ぶ、という取り組みで、目標の200万人参加が達成されれば、ギネスブックに登録される。趣旨は、世界の7300万人の子どもたちが教育を受けていないことを知るとともに、だれもが教育を受けられるように世界として取り組みを進めることにある。本学級も児童数11人とはいえ参加して、一人ひとりが一生懸命発展途上国の子どもたちの問題を考えた。ねらいは、世界にはどうして学校に通えない子どもがいるのか、また、学校に通っていたとしてもどんな問題をかかえているのか知ることである。児童は写真から読み取れることをどんどん発表していった。5年生は学校に通えない子どもがどうして通えないのか写真からわかることを発表することができた。6年生はさらに深く読み取れた。たくさん発表した中からほんの一言程を紹介する。

・この子たちに共通していることは、ぼくたちと違って自由がない。(A児)

・この子たちは、何も悪くないのに、子どもたちにしわよせがいつている。(B児)

・子どもなんだから、遊びたい時期なのに、みじめな状態にいる。大人がいるのにどうして戦争や問題を解決できないんだろう。(C児)

・この子たちは、子どもらしい楽しいことを体験することなく苦しいことばかりで人生を終えてしまう。(D児)

・子どもが子守をしないとけなくて、学校に行けないなんて、豊かな国との差がありすぎてもっと平等な世界になるべきじゃないかと思いました。(E児)

〈まとめの段階で〉

・豊かな環境に育っているぼくたちが、いきなり明日から戦争の下におかれたらとても暮らして

いけない。これからは、少しでもこのような状況に関心をもちたいし、世界からこんな子どもたちがいなくなるとよいと思う。(F児)

日本とは随分事情の違う外国の様子に対して驚愕した児童は、写真から読み取れることを積極的に発言し、一人ひとりが一生懸命発展途上国の子どもたちの問題を考えた。

学校に通えない子どもたちに共通していることは、自分たちと違って自由がないこと、子どもたち自身がどうしてもできない状況であり、子どもたちにしわよせがいつてゐること、子ども時代に勉強も含め、楽しいことを体験することなく人生を終えてしまうことに対する理不尽さを考えることができた。このように、児童は、教育から排除される子どもの状況を知っただけでなく、さらには、世界の不平等や貧困等の問題に関心をもちたい意欲や意識を持つことができた。

問題を解決することは簡単ではないが、児童が世界の現実を知ったことは、状況を変えるための大きな一歩となったと思われる。私たちが、環境問題を始め地球に住んでいることを今ほど強く意識しなければならない時代はない。それゆえ、今後は、児童にグローバルな視点を育てると共に、身近にできることを行う実行力を培いたいと思った。

2) 「北海道洞爺湖サミット」のG8首脳にメッセージを送付。

2008. 7. 7～9 「JNNE」の活動に参加

洞爺湖サミットについて、関心を持つことができた。

3) 世界同時開催「テイクアップスタンドアップアクション」(※)に参加

2008. 10. 18 (修学旅行中)

これは、みんなが世界から貧困と不平等をなくすことに関心を持ち、立ち上がろう(Stand up!)、というメッセージをアクションで示す取り組み。世界で、約1億1700万人の参加者があった。日本では2万2698人が参加した。341枚の写真の中からユニセフ選考委員のもと、ユニーク賞10枚のうちの1枚に選ばれネットに掲載された。

※2000年の国連総会において、2015年までに世界の貧困を半減させる「ミレニアム開発目標」が世界の約束されたので、これを確実に守ってもらうために世界のリーダーたちを動かす取り組み。世界の人々が同時に立ち上がり、その数でギネスに挑戦するグローバルイベント。



4) 広島への修学旅行

修学旅行で広島、大久野島に行き、戦争の被害と加害の両面、そして、大和ミュージアムでは大和の歴史と乗組員の方々の心情を学んできた。

例年、事前学習については、太平洋戦争の終わりまでの歴史と広島への原子爆弾についての被害、大久野島での史実、戦艦大和の歴史と役割について学習していくのだが、今年は児童が学習内容を大変よく理解していて、いずれの見学地においてもガイドさんに質問されたことにすんなり答えることができた。事前に学んだことを確認するレベルの修学旅行だった。6年生も半年経たこの時期、児童には少々難しいことでも理解する力が育っていた。何より純真で、物事に対し素直に受け止め自分なりに一生懸命考えようとするゆえ、広島に出かけ平和について学ぶ意義があった。被爆体験者の体験談を聞いて、体験者と共にどの子も涙ぐんだ。

「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、見て感じることは教科書で学ぶ以上のものがある。詳細は忘れても、五感で感じたことは脳裏のどこかに残り、大人になった時に物事を考え判断する一つの要素となるかと思う。

K児は、広島平和記念資料館において、歴代の市長が核実験をした国に対して抗議メッセージを送っているその数の多さに驚いた。そして、なぜこれほどまでに核が増えたのかを調べたいと思うようになる。

5) 「伝えたい！平和への想い」への取り組み

10月下旬～

毎年2月の総合学習の発表会において、下学年や保護者、地域の方に各自がテーマについて調べたことと想いを伝える。4月来、歴史を、いわゆる「普通の人々」（民衆）の側やものごとには裏表があるというスタンスに立って学習してきた。修学旅行後、今までの先輩が平和の大切さについて伝えてくれたように、「平和への想い」を発表会で伝えるかどうか決めさせた。

児童は、ヒロシマについて学び、現地で受けた感動が高いモチベーションになって、自分の疑問を追求したいと思った。6人が話し合いをして、今までの6年生の発表内容と違う課題を個々の課題として決めた。世界の紛争の現状や子どもに及ぼす問題点、核削減の状況と課題についてまとめることになった。

11月

憲法について学習

今年も憲法を学習した後と2学期最終の歴史の学習時間に「憲法や歴史を学んで思うこと」をテーマに自分の考えを述べさせた。

その要約を記述したい。

A児

・明治以後の日本の様子はすごい進歩だった。そんな日本が戦争をし、原爆を受けた。が、日本は立ち上がり以前以上に進歩した。それは素晴らしいことだ。でも、戦争は人を殺す。兵隊さんは例え命令であっても殺すことに間違いない。やっぱり私はそれではだめだと思う。今も戦争をしている国々がある。私たちは今は止められないけれど、世界中が仲良くなるようにしたい。

・私たちは、世界を核兵器のないいい国にしていく使命がある。とにかく核をなくしてほしい。

B児

・日本は鎖国から西洋風の国にしようと必死になった明治維新の時代が興味深かった。

日本は、太平洋戦争で多くの人々を死なせてしまった。焼け野原になった戦後を人々の努力によって今の日本に進歩させた。その力強さに感動した。ぼくも大人になったら自分のできることに取り組みたい。

・国民の意見を取り上げ、戦争という悲しみや不幸を与えることを二度としないという憲法、この日本国憲法が他の国の手本となるとよい。一発の核で地球がこわれる。そんな核を絶対なくしていきたい。

C児

・明治時代後半から、日本はいくつも戦争をし、国民は苦労した。日本と戦ったアジアの人たちはもっと大変だっただろう。でも、今は国民の努力でこんな平和な日常がある。

でも、一歩間違えばまた戦争にもっていつてしまうかもしれない。間違いのない選択をするためにぼくらはしっかり歴史を理解し、もっと勉強をしたい。

・憲法9条を古くさいという人がいると知って、戦争の恐ろしさや悲しみを忘れていたのではないかと思った。でも、国民はちゃんとわかっている。この国民主権のある憲法が大切だ。

D児

・歴史を勉強して20世紀は戦争の時代だったとわかった。広島に行き、原爆の大きな被害を受けたことを学んだが、復興のすごさにびっくりした。今の平和な世の中はいろんな人のおかげだ。でも、判断を間違えるとまた戦争になる。ぼくらは、二度とあんな時代に戻らないように、そして、判断を誤るこわさを次の世代の人々に伝えたい。

・せっかくこの地球に生まれてきたのに、核兵器使用でふっとんでしまう。核兵器を使用された唯一の日本は核を作らないよう世界の国々を説得していくべきだ。この憲法はどこの国にとっても良い憲法だから広めたいと思う。平和な世界にしていきたい。

E児

・日本は原爆を受けてかわいそうだとばかり思っていたが、日本の加害について知った。今ぼくたちは好きな物を食べ、好きなことができる。でも、一歩外に出れば、多くの発展途上国がある。泥水を飲んでいるこどもたち、子どもなのに兵士にならなければならない子どもたちがいる。戦争は人の人生を狂わすものだ。今、ぼくらがぱっと解決できるわけではない。しかし、大人にはたらきかけ、歴史から絶対目を離さず、これからも直視していきたい。

・憲法に、日本は戦争をしないとうやく誓った。でも、他国では戦争をしている国もあるし、核兵器を持っている国もある。それらの国に対して考えを変えるように、そして少しでも核のない日が早く来るように日本国憲法の考えを広めていくことが大切だと思った。

どの子も歴史の流れの中に今、生きている自分のあり方を述べられたことに対して、うれしく感じた。社会科の細かい知識は、誰でも忘れてしまうが、彼らは歴史から「ものごとに対するとらえ方」を学んだ。そして、考えた。それを頭の中で文章化し構成し

て話せるようになった。もちろんその表現力や考え方の成長ぶりはとてもうれしいが、でもそれ以上に、大人とは違い、彼らのこの尊く純粋な気持ちが未来を作っていくということに喜びを感じた。

冬休み

2008. 12. 23～2009. 1. 6

1月から発表に向けて本格的に取り組む予定をしていたので、自分の課題に関する情報を集めたり、地元の図書館で本を借りて読んだりした。

1月

いよいよ「伝えたい！平和への想い」に取り組む。5人の男児は、去年の6年生に負けたくないという性格がとても強い。がんばるだろうと思ったので原稿を書くにあたって約束をした。

〈原稿を書く際の約束〉

- データーに基づくこと
- 聞いている人にわかりやすい説明文にすること
- 考えに考え抜いて12才の自分の考えを伝えること

児童は、情報や資料を読み進めていくにつれて、子どもゆえなおさら、真剣に考え、どうしても伝えたい、伝えなければならないという気持ちになった。そして、新聞をスクラップしたり、インターネットで調べたり、書物を読み理解し下書き原稿をノートに書き始めた。

〈一人ひとりのテーマ〉

- ①被爆体験者の実話を紙芝居にして（下学年対象に）
- ②なぜ核がこんなに増えてしまったのか
- ③世界は核削減の努力をしたのか…NPT、CTBT、START I、IIについて
- ④戦争によって傷つけられる子どもたち…少年兵、難民、児童労働をさせられる子どもたち
- ⑤なぜパレスチナ紛争が起きたのか、現在の状況について

※このテーマに取り組んだ児童は、最初はイラク戦争について調べたいと思っていたが、12月末にパレスチナ紛争が勃発したので変更し、中東問題について調べることにした。

- ⑥戦争の愚かさを数字から見て…死者数及びアメリカの戦費から考察する

2月

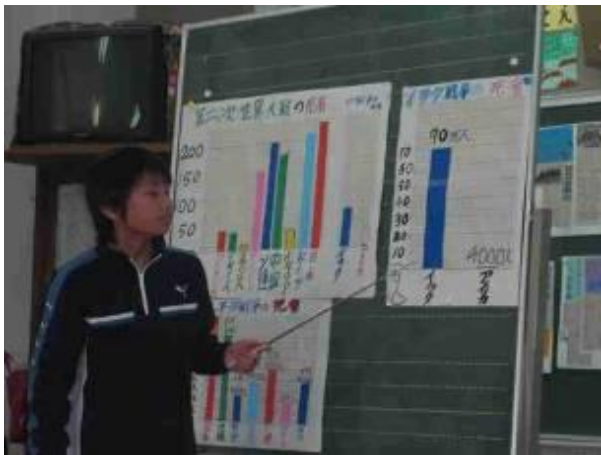
原稿用紙に下書き原稿を書き始めた。発表の仕方は各々決めていたので、フリップ、プレゼンテーションソフトで編集、グラフ、新聞の切り抜き等のポスター等、発表資料を作成し始めた。パレスチナ紛争については、新聞社によって報道のニュアンスが違う

ので、仲間も協力して3社の記事をスクラップし、記事を選択し資料を作った。

原稿の書き直しを何度もさせた。資料が速く完成した者は、学校で発表練習をした。この発表練習は原稿を覚え、見ている人を意識して話す練習である。児童一人一人には自分の発表のイメージがあるため、それに向かって教師が指示を出さずとも進めていった。発表当日までの時間を考えると、どうしても学校でできること（資料作りやプレゼンテーション練習）と家でできることが見通せてくる。それゆえ、どの子も原稿は毎日家で書いてくるような状態だった。

2月23日 発表会

「平和の大切さを伝える」ことができた。



5. 活動の成果

児童においては、6年間の集大成として、自分たちの思いを伝えるんだという意気込みがものすごく強かった。モチベーションが高いとそれを持続することができるのだと

改めて思う。小学生にとっては、難しい内容だったが、当人が理解できないと話にならないので本やインターネットからの情報、新聞からの資料をよく読みこなした。大人の私自身でさえ全く知らないような「マープ」という兵器や核弾頭の保管状況や、核削減条約の詳細、アメリカや日本の戦費、さらには今後アメリカがイラク戦争従軍兵士と家族に保障しなければならない膨大な費用など、本当によく調べ理解したと思う。私自身も子どもに教えられ、子どもと共に勉強できた。

さらに、聞いている人にわかりやすい文章にするために何度書き直したかわからない。100枚以上の原稿用紙がまたたく間になくなった。提示する数字は全てわかりやすいように何かに置き換えさせた。（例えば、3兆ドルとは、一万円札を3776mの富士山の820倍だとか、難民キャンプで配られる食事の内訳とその量が給食の5分の1であるというように）学校では提示するフリップやグラフパソコンでのプレゼンを作成するのが精一杯だったので、家で家族には見えないところで相当努力していた。それぞれが自分の発信イメージがわかっているだけに、集中力が違った。一切無駄口なくぴりっとした雰囲気があった。

特に、最後の自分の意見文を書くのに苦労していた。ずっと机に向かい自分の考えを一行一行書き進めていった姿は今も頭に浮かぶ。「自分の言葉でない。」とだめ出しを何回してもへこたれず書いてきたその粘り強さには感心した。児童によっては、7回も書き直したらしい。

そして、本番、各々の児童の発表の持ち時間が12分から15分、全体で1時間20分の発表をやりきった。全体の流れの構成から、仲間のプレゼンテーションのパソコン操作も全て児童が行った。

当然ながら、下級生は多少理解できない内容でも真剣に聞いてくれた。平和の大切さや世界にかわいそうな子どもたちがいることは理解できた。低学年は、作文に「戦争は本当にこわい。」「食べ物を残さないで食べたい。」等、小さいなりに思いを持ってくれた。大人は、児童を賞賛してくれただけでなく、改めて平和の大切さを考えさせられたという感想を寄せてくれた。（中でも、主観ではなくデーターや事実に基づいてしっかりと発表できているという感想をもらったことは、支援者にとってうれしいものだった。）

6名の児童においては、5年生（2007年度）の当初の実態から比較すると、どの子も良く成長した。一連の活動の経過の中で、それぞれ、何かしらがきっかけとなり、動機となり追及していく姿が見られた。大人のように、世界の様々な問題に対して、時としてあきらめたり、人ごととして見ないようにしたり、誰かに依存したりせず、純粋に考え今子どもの自分ができる答えを出したこと、そして、それを誰かに伝えようとアクションを起こしたことが大きな成果だと思う。

一部の児童の意見文の抜粋を記述して成果としたい。

○「世界は核削減の努力をしたのか」をテーマにした児童

今、核兵器が何発もある中でぼくたちは暮らしています。もし、核戦争が始まると地球はこわれてしまうことはわかりきっています。そう考えるとアメリカやロシアなど核保有国は、核を減らす責任があるし、地球のためには「地球温暖化」などもっと他に取り組むべきことがあるはずで

す。条約など、約束であって破ってしまえばもう終わりです。もっと行動で示してほしいです。

また、世界では核廃絶を目的とした民間レベルの運動、署名活動などをしたりしていることがこの学習を通してわかりました。(中略)世界中の多くのNGOやNPOが再検討会議のロビーで各国に訴えていることを知りました。日本でも世界でも言論で訴えたりいろいろな活動が行われていることがわかりました。

こうした世論の力が、世界を核廃絶の方向へ向かわすことになります。ぼくたちもヒロシマのことをしっかり勉強して大人になった時に、何をするべきか考えて行動したいと思います。

○「パレスチナ紛争」について調べた児童

今の日本は平和で戦争もなく、戦争の本当の恐怖は知らない。でも、パレスチナの人々は毎日、イスラエル軍の砲撃におびえて生活していると知りました。だから、今パレスチナの人々にとって必要なのは、食料や住む所も大切だけど、たとえそれがあっても爆撃があつたら生活できないし、一番は「平和で安心して暮らせる日常」だと思うから一刻も早く停戦するべきだと思う。

イスラエルは、やりすぎで非道だと国際的に非難されていますが、新聞を読むうちにあることに気がつきました。それは、(イスラエルの人々が)正確な情報を知らされていないということです。このことによって一人一人は善良なのに、正確な情報を知らされないことによって恐怖心が生まれ、相手を何千人殺していても命の重みを感じられず何とも思わなくなっているのです。(中略)

まだ何も知らない子どもたち(パレスチナ)まで重傷を負ったり、家を失ったり、親を殺されたりすると恨みを持つことになっていずれは復讐する、そしたらまたイスラエルが報復攻撃するとうように、悪循環するし、罪のない人々まで巻き込む戦争は最悪だと思いました。

ぼくたち民間人が直接できることはないから、国連や世界の国々が両方に働きかける努力をしてほしいし、ぼくたちはこの戦争についてよく知っておくことが大切だと思います。

○戦争の愚かさを死者数やアメリカの戦費から考察した児童

…このイラク戦争で、アメリカは兵器などに多くのお金を使い、戦争後も軍人にお金を一生払い続けます。そして、イラクを立て直すにも多額のお金がいることでしょう。つまり、この戦争では、多額のお金で兵器を買って被害を与えて、結局自分の国がそこを直して、兵士を出して傷ついて帰って来た人にも…(略)この戦争でイラクの治安がよくなったとでも言うのだろうか。莫大なお金を使って何か良いことがあったのだろうか。よくないことばかりです。人間とは、それほど愚かな者なのです。まさにこの戦争は人間の愚かさを語りかけているのです。

ぼくは、戦争を数字の面から調べていって悲しみだけが残ることがわかりました。20世紀は厳しい生活をさせられた戦争もありました。何の罪もない人々を無差別に殺した戦争もありました。世界中で戦争したこともありました。追い込まれ死んでいった人もたくさんいました。人間が行う戦争に得なんてものはありません。戦争にあるのは、人々の悲しみ、様々な悲劇、がれきとなった町だけなのです。戦争とは人が作り出すものなのだからしっかりと人がなくさなければいけないと思います。

世界は、人は、あやまちから多くのことを学びます。人はもう十分なほどあやまちを犯してきました。だから、これからは世界中から戦争を無くし、人々の心の中に「戦争をしてはいけない」ということを、ぼくたちはこうして伝えたかったのです。

○戦争によって傷つけられる子どもたちについて調べた児童

…ぼくは、子どものことを調べていてひどい状況を知りました。まして今世界は大不況。日本でも不況不況といって派遣労働者がやめさせられ、ホームレスの人が増加しています。日本でさえこんな様子なのだから貧しい国では一体どうなるのでしょうか。きっと食料が不足して餓死する人が増えてしまうと思います。この大不況で裕福な国すら大変なのだから貧しい国との格差が以前よりもっと開いてしまうと思います。世界中がもっと援助することが大切です。お金だけでなく、野菜の作れる畑を作ったり、安全なキャンプを作ったりして環境の面でも援助していきます。特に日本は援助金が少ないから、現地の人たちが自立する手助けをすることが大切です。

ぼくは、自分の知ったことを伝えられてとてもうれしいです。大人になったときに、国際貢献できるように、今は勉強して今後のためにも力をつけようと思います。

6. 終わりに

世界の問題に対して、まずは知ることが大切だとは思いますが、人として共感する気持ちや想像力を培うことが何より重要だと思う。私は、「共感的想像力」という言葉を使っているが、不平等に対する不合理や子どもの問題に対する理不尽などが深まって共感的想像力が育つような気がする。12才という真っ直ぐ思考できる時期に、いろいろと活動できたことはタイムリーであつたし、私の思う以上に育ってくれたと感じる。彼らは、後に3月の卒業式に「イマジン」を英語で歌い、歌声で皆にその思いを届けることになる。

「今は、子どもだから大きなことはできないけれど、大人になったときに国際貢献できるように勉強して今後のために力をつけたい。」と言って巣立っていった子どもたち。私自身は大人でありながら大したことは何もできないけれど、最初に書いたように、国際理解教育とは何か、児童にどんな力をつけたいか毎年悩み、思考錯誤しながら、こんな言葉を発してくれる子どもを育てることが私の国際貢献かなと時々思っている。将来、彼らが大小問わず各々ができる国際協力をすると思っていて…。